

新型コロナウイルス感染症と障害のある子ども —休校期間における子どもと 家族の生活の実態を中心に—

丸山 啓史

COVID-19 and Children with Disabilities:
Family Life During School Closures

Keishi MARUYAMA

Accepted October 7, 2020

抄録：障害のある子どもの保護者を対象とするアンケート調査をもとに，新型コロナウイルス感染症の流行にともなう休校の期間における子どもと家族の生活の実態を示した。学校の「受け入れ」や放課後等デイサービス事業所の開所が重要な役割を果たしたことを確認し，子どもの居場所を社会的に確保することの必要性を指摘した。また，学校や事業所と子どもや保護者とのコミュニケーションの重要性を示した。さらに，休校期間における学校の課題（宿題）をめぐる問題や，感染をめぐる問題について，注目すべき点を提示した。

索引語：新型コロナウイルス感染症，休校，障害のある子ども

Abstract: This study investigates the living conditions of children and their families during the school closure associated with the outbreak of COVID-19 using a questionnaire survey of parents of children with disabilities. The responses highlight the importance of securing children's places for life and activities during the day, confirming that the school's "child care" and the opening of after school day service centers played an important role in promoting children's well-being. The responses also show the importance of communication between schools and after school care centers and children and parents. In addition, to the responses highlight problems associated with school assignments (homework) during the school closure and the problems of infection of COVID-19.

Key Words: COVID-19, school closure, children with disabilities

1. 問題の所在

2020年2月27日、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）への対策を理由として、日本の内閣総理大臣は学校の一斉臨時休業を要請する意向を表明した。それを受けて、2月28日には、文部科学省が「新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等における一斉臨時休業について」という通知を出した。その後、2020年の3月末から5月上旬にかけて日本国内で新型コロナウイルス感染者が急増し、およそ3か月にわたって多くの学校が休校になる事態となった。

新型コロナウイルス感染症の広がりや、それに関連しての学校の休校は、子どもと家族の生活に大きな影響を及ぼした。そうしたなか、子どもと家族の実態等を把握するための調査が少なからず実施されてきている。たとえば、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（2020）は、全国各地の小学生以上の子どもを対象とする調査を行い、子どもの困りごと・心配ごとや要望を提示している。国立成育医療研究センター（2020）は、2500人以上の子どもと6000人以上の保護者からアンケートへの回答を得て、子どもと家族の生活の状況などをまとめている。また、各地域の実情を把握しようとする調査も実施されているほか（沖縄県学童・保育支援センター 2020a, 2020b）、一つの小学校のPTAによる調査も存在している（西郷 2020）。さらに、しんぐるまざあずふぉーらむ（2020）がひとり親世帯を対象とする調査結果をまとめており、チャンス・フォー・チルドレン（2020）が生活困窮世帯の子どもについての調査結果をまとめているように、特に大きな困難を抱えがちな子どもと家族に焦点を当てた調査も行われている。

一方で、障害のある子どもと家族に焦点を当てた調査は、ほとんど見当たらない。全国児童発達支援協議会（2020）などが障害児支援事業所を対象とした調査を実施しているものの、それらは障害のある子どもと家族を直接の対象にした調査ではないため、障害のある子どもと家族の実態を詳しく示すものではない。大津市障害者自立支援協議会（2020）が障害のある子どもの保護者を対象とする調査を2020年6月に実施しているものの、多くの学校が休校になっていた時期においては、障害のある子どもと家族の実態を把握しようとする調査は十分に行われていなかった。

そうしたなか、筆者は、京都府内の放課後等デイサービス事業所等の協力を得て、2020年の6月から7月にかけて、学校に在籍している障害のある子どもの保護者を対象とするアンケート調査を実施した。本稿においては、その調査をもとに、新型コロナウイルス感染症の広がりや学校の休校に関して、休校期間における障害のある子どもと家族の生活の実態を中心に、障害のある子どもをめぐる問題状況を示す。

このことは、新型コロナウイルス感染症の再度の広がりや、他の感染症の広がりなどによって、再び学校の休校が余儀なくされる場合の対策にも寄与すると考えられる。

なお、田沼（2020）は、「一斉休校によって、学校の果たしている役割、存在意義が一気に浮かび上がってきた」（p.64）と述べている。また、丸山（2020）は、障害のある子どもの学校教育に着目しながら、「子どもが学校に通えなくなるという事態は、学校の大切な役割を浮き彫りにした側面もある」（p.12）と指摘している。休校期間における障害のある子どもと家族の生活の実態などを把握することは、学校や放課後等デイサービス事業所に求められている役割を改めて確認することにもなると考えられる。

2. 方法

アンケート調査の対象は、京都府在住の、学校に在籍している障害のある子どもの保護者である。

調査は、質問紙および web アンケートを用いて実施した。質問紙と web アンケートの内容は同じものである。質問紙には、web アンケートを用いての回答も可能である旨を記載しておいた。また、質問紙および web アンケートにおいては、他の保護者に web アンケートを紹介してほしい旨を書き添えていた。

質問紙は、20 か所の放課後等デイサービス事業所等を通じて、事業所に通う子どもの保護者に配布してもらった。協力事業所の内訳は、放課後等デイサービス事業所が 17 か所であり、その他の障害児（者）支援事業所が 3 か所である。保護者の回答が記入された質問紙は封入されたかたちで事業所に回収してもらい、回収された質問紙を事業所から調査者（筆者）に送付してもらった。

調査期間は、2020 年 6 月～7 月である。

調査内容は、①子どものこと（学年、在籍している学校・学級の種類、障害種別）、②休校期間中の生活（過ごし方、休校期間中に困ったこと、など）、③放課後等デイサービスに関すること（利用状況、事業所が休所した場合の影響、事業所の対応に関する思い、など）、④学校の対応に関する思い、⑤行政への要望、⑥今後のことで心配なこと、などである。①と②については基本的に選択回答形式での回答を求め、③については選択回答形式及び自由記述形式での回答を求め、④～⑥については自由記述形式での回答を求めた。先例のない状況に関する、先例の乏しいアンケート調査であったため、さまざまな問題状況を具体的に把握することを重視し、自由記述形式での回答を求める質問を多く設定した。

放課後等デイサービス事業所等に配布を依頼した質問紙は合計で 632 通である。それに対して、回収された質問紙は 226 通であり、web アンケートには 62 件の回答があった。合計で 288 人から有効な回答を得ることができた¹⁾。

回答者の子どもは、小学生（低学年）が 103 人（35.8%）、小学生（高学年）が 76 人（26.4%）、中学生が 68 人（23.6%）、高校生が 39 人（13.5%）であった²⁾。

回答者の子どもが在籍している学校・学級の種類をみると、特別支援学校が 143 人（49.7%）、特別支援学級が 65 人（22.6%）、通常学級が 80 人（27.8%）であった。

回答者の子どもの障害種別は、表 1 の通りである。「知的障害」と「発達障害」が重複している子どもは 68 人、「発達障害」のみの子どもは 96 人であった。

表 1 子どもの障害種別（複数回答）n=282

発達障害	171	(60.6%)
知的障害	147	(52.1%)
肢体不自由	32	(11.3%)
聴覚障害	32	(11.3%)
視覚障害	14	(5.0%)
医療的ケアが必要	14	(5.0%)
その他	20	(7.1%)

本アンケート調査は、障害の程度・種別や年齢において幅広い子どもの保護者を対象にすることができたと言えよう。

3. 休校期間の生活の実態

(1) 過ごし方

休校期間の生活について、アンケートでは、「休校期間中、お子さんはどのように過ごしていましたか」という質問を設け、当てはまる選択肢をすべて選んでもらった。回答は、表2のようになっている。

表2 休校期間中の過ごし方（複数回答）n=288

親と過ごした	247	(85.8%)
きょうだいと（きょうだいだけで）過ごした	60	(20.8%)
祖父母と過ごした	55	(19.1%)
放課後等デイサービス（またはタイムケア等）に行った	198	(68.8%)
学校の「受け入れ」「預かり」に行った	50	(17.4%)
ヘルパーによる支援を利用した	10	(3.5%)
親の職場で過ごした	7	(2.4%)
その他	9	(3.1%)

「放課後等デイサービス（またはタイムケア等）に行った」という回答が多くなっているが、そのことについては、主には放課後等デイサービス事業所（以下、事業所）を通じてアンケートを実施したことを念頭に置いて理解する必要がある。

目を向けなければならないのは、障害のある子どもと家族との関わりであろう。表2をみると「親と過ごした」という回答が多くなっているが、「親と過ごした」という回答のみを選択した回答者は36人（12.5%）に及んでいる。自由記述回答においては、「子供の世話をずっと一人で見ないといけない」（小学生，特別支援学級）、「母親がずっと面倒を見なければならず精神的・時間的に負担が多い」（中学生，特別支援学級）、「1日中1人で世話をするのは大変」（高校生，特別支援学校）といった回答がみられるが、休校期間には主に母親が障害のある子どものケアをしていたという例が少なくないと推測される。

また、「きょうだいと（きょうだいだけで）過ごした」という回答が60件に及んでいることにも注意が必要であろう。回答者のうち16人は、「親と過ごした」と「きょうだいと（きょうだいだけで）過ごした」という2つの選択肢のみを選択している。週2日は親と過ごし、週5日はきょうだいと過ごしたという人や、週4日は親と過ごし、週3日はきょうだいと過ごしたという人もいる。事業所が休所する場合についての質問に対して、「他の姉兄の負担が増える」（特別支援学校（学部は不明））、「共働きで保護者が仕事を休みにくいので、上の子に頼らざるを得なくなる」（低学年，特別支援学校）、「兄弟に負担がかかる」（高学年，特別支援学校）といった回答がみられるが、休校期間における障害のある子どものケアをきょうだいが担っていた例も少なくないと推測される。

さらに、「祖父母と過ごした」という回答が多いことも無視できない。表3について後述するように、「休校期間中に困ったこと」に関しては、「感染のことを思うと祖父母に預けられなかった」と回答している保護者が少なくない。それに関わらず、「祖父母と過ごした」という回答が多くなっている背景には、感染³⁾の危険性があっても祖父母に子どものケアを頼らざるを得ない状況があったのではないだろうか。

アンケートは事業所等を通じて実施したため、回答者の多くは事業所等との結びつきをもっている保護者だと考えられる。それにも関わらず、ほとんど社会資源を活用することなく休校期間を過ごした子どもと家族が少なくないことがうかがえる。

(2) 困ったこと

「休校期間中に困ったことは何ですか」という質問に対する回答は、表3の通りである。

表3 休校期間中に困ったこと（複数回答）n=277

テレビ・動画・ゲーム等の時間が多かった	181	(65.3%)
子どもの生活リズムが崩れた	143	(51.6%)
子どもをみる保護者の負担が大きかった	107	(38.6%)
保護者がイライラすることが多かった	103	(37.2%)
子どもがイライラすることが多かった	75	(27.1%)
感染のことを思うと祖父母に預けられなかった	74	(26.7%)
きょうだいゲンカが増えた	72	(26.0%)
学校から出された宿題・課題が大変だった	69	(24.9%)
保護者が仕事を休むのが難しかった	55	(19.9%)
保護者が仕事をするのが難しかった	54	(19.5%)
子どもの食べる量が増えた	52	(18.8%)
自宅で過ごすことが難しかった	50	(18.1%)
事業所の利用ができなかった	39	(14.1%)
子どもの通院が難しくなった	28	(10.1%)
子どもの自傷・他害・パニックなどが多くなった	26	(9.4%)
その他	33	(11.9%)

「テレビ・動画・ゲーム等の時間が多かった」という回答が最も多くなっており、子どもの活動の幅が制約されていた様子がうかがえる。事業所が休所する場合についての質問においては、「子供がずっとスマホを見るだけになってしまう」（中学生，特別支援学校）、「ゲームなどばかりになる」（高校生，特別支援学校）といった回答がみられた。

また、「子どもの生活リズムが崩れた」という回答も多い。自由記述回答においては、「障害を持っている子は学校生活が失われると生活のリズムが変化し、ストレスに感じ、日常の生活に戻すには時間がかかりました。夜中も起きて1～2時間遊ぶような睡眠障害もありました」（小学生，特別支援学級）、「子供の生活リズムがまだ戻らない」（中学生，特別支援学校）、「学校が始まりようやくリズムを取り戻しつつある中、また休校などになり生活のリズムが崩れるのが心配です」（高校生，特別支援学校）といった回答がみられた。

そして、上記の2つに次いで、「子どもをみる保護者の負担が大きかった」「保護者がイライラすることが多かった」「子どもがイライラすることが多かった」という回答が多くなっている。これらは、おそらく、完全に別個の問題なのではない。子どもの生活リズムが崩れたり、子どもがストレスを抱えたりすることが、「子どもがイライラすること」につながり、そのことが「保護者がイライラすること」や「保護者の負担」につながっていることもあると考えられる。学校の休校などの影響がさまざまに絡み合うなかで、表3に示されるような「困ったこと」が生じていたのではないだろうか。

事業所との結びつきをもっている子どもと保護者が多くの困難を抱えていたとするならば、事業所

との結びつきをもたない子どもと保護者はより大きな困難を抱えていた可能性もある。

4. 放課後等デイサービスに関すること

(1) 休校期間中の開所について

放課後等デイサービスに関しては、「事業所の対応に関して、良かったと感じておられること」について、自由記述での回答を求めた。

それに対しては、困難な状況のなかで事業所が開所を続けたこと、子どもが事業所に通えたことを肯定的にとらえる回答が非常に多かった（100件程度⁴⁾）。

- ・自粛期間中も感染防止に留意しながら開所されたこと。（小学生，通常学級）
- ・コロナの中，受け入れて下さり本当にありがたかったです。（小学生，特別支援学級）
- ・急に休校が決まり不安だったが，開所して下さり本当にありがたかった。（小学生，特別支援学校）
- ・休校中ずっと開所してくださったこと。感謝しています。（中学生，特別支援学校）
- ・事業所が休まず利用できたし，子どもも行くのを楽しみにしていたし，皆さんがよくしてくださっているので良かったです。（高校生，特別支援学校）

事業所のなかには，子どもの受け入れの時間を早めるなど，家庭の事情に応じて柔軟な対応をしていたところもあったことがうかがえる。

- ・早い時間からの預かりを何度か依頼出来たこと。（小学生，特別支援学級）
- ・本当の時間より早く受け入れていただいた。（小学生，特別支援学校）
- ・通所回数の変更について対応してもらえたこと。（小学生，特別支援学校）
- ・家庭の事情を分かってくれ，利用日でない日でも受け入れてくれた。（中学生，特別支援学校）

また，実際に子どもが通所することはなかったものの，事業所が開所していることが安心感につながっていたという回答もみられる。

- ・1か月半自粛し利用していませんでしたが，何かあった場合に利用させて頂ける安心感がありました。（小学生，特別支援学校）
- ・利用はしなかったが，開所してくれていたのので，いざというときは利用できる安心感があった。（中学生，通常学級）

休校期間においても事業所の多くが開所を続けたことで，子どもの生活が相対的には良いものになっていた様子が，以下のような回答からうかがえる。

- ・休校中に利用出来たので子供の気分転換にもなったと思うので良かった。（小学生，通常学級）
- ・休校中，学校がなかったため放課後等デイサービスを利用することで生活リズムが保たれた。家でいることでだらだらした生活になるが，毎日行くことで運動・学習面で安心できた。（小学生，特別支援学級）
- ・学校休校中に開所していただき，子供が行くのを楽しみにしており，帰宅後は気分よく過ごせ，親もイライラすることがなくなりました。（小学生，特別支援学級）

また，保護者の仕事との関係においても，放課後等デイサービスが重要な役割を果たしていたことがうかがえる。

- ・ずっと朝から父母の仕事が終わるまで預かってもらったこと。（小学生，特別支援学校）

- ・開所して頂いたおかげで仕事ができた。(中学生, 特別支援学校)
- ・できるだけ対応してくれる事業所もあり, 親の仕事の時間まで預かってもらえた。(中学生, 特別支援学校)
- ・共働きの為, 仕事を休まなければいけないところでしたが, 事業所を活用させていただけたので助かりました。(中学生, 特別支援学校)

事業所が休所すると困る理由についての質問に対しても, 保護者の仕事に言及する回答が多い(75件程度)。仕事の性質により仕事を休みにくい保護者, 経済的理由で仕事をする必要のある保護者などにとっては, 子どものケアを担う社会資源が欠かせないのである。

- ・仕事が医療関係で休めないため。(小学生, 特別支援学校)
- ・親が社会福祉施設に従事しており, 休む事が難しい。(高校生, 特別支援学校)
- ・仕事を休めないこともあるから。(中学生, 特別支援学校)
- ・仕事の都合がどうしてもつかない時に困る。(小学生, 特別支援学級)
- ・保護者が就労できなくなるので, 生活できなくなる。(小学生, 通常学級)
- ・仕事を休むと収入が減るため。(中学生, 特別支援学校)

また, 保護者が就労していない場合や, 仕事を休める場合であっても, 放課後等デイサービスの存在は保護者にとって大きな意味をもっている。事業所が休所すると困る理由については, 親の負担に言及する回答も多かった(30件程度)。

- ・親の気が休まらない。(小学生, 通常学級)
- ・親の負担が大きい。(小学生, 特別支援学校)
- ・医療的ケアを含めすべて親がすることになり大変な負担になる。(高校生, 特別支援学校)

休校期間において, 放課後等デイサービスが子どもと保護者にとって重要なものになっていたことが, アンケートからうかがえる。

(2) 保護者と事業所との関わりについて

「事業所の良かった点」については, 事業所が電話で保護者の話を聞いたり, 事業所が保護者の相談にのったりしていたことを肯定的にとらえる回答が少なくなかった(15件程度)。事業所が, 子どもの支援を行うだけでなく, 保護者を支える役割を果たしていた例も多いことがうかがえる。

- ・自粛期間中も電話で相談に乗ってもらえて安心だった。(小学生, 通常学級)
- ・本人の状況, 家族の状況をよく理解してくださっている上で, 相談にのってもらえる安心感があったこと。いつでも相談にのってもらえたこと。(小学生, 通常学級)
- ・本当はそこまで頼ってはいけいけいなのですが, 頼る所がなくて相談ばかりさせてもらって本当に助かり, 心から感謝しております。(小学生, 特別支援学級)
- ・定期的に電話で様子を聞いて下さって, お話できたことは心強かったです。(中学生, 特別支援学級)
- ・親のフォローも充実していた。(中学生, 特別支援学級)
- ・親のメンタル不安にも応えてくださったこと。(高校生, 特別支援学校)
- ・親の不安や心配に寄り添ってくれた。(高校生, 特別支援学校)

なお, 感染対策のために通所を控えることを事業所が理解してくれたことを肯定的にとらえる回答が複数みられた。

- ・（自粛して）休んでも休まなくても、各家庭の判断で決めさせて頂けた。（小学生，通常学級）
- ・自粛して利用しないことを受け入れていただけた。（中学生，特別支援学校）
- ・事業所を利用することに不安を感じる保護者を理解してくれたこと。寄り添ってくれたこと。（高校生，特別支援学校）
- ・休校中，利用するまで待っていてくださったこと（母が利用しても大丈夫と思えるまで待ってくださり，いつ利用再開になっても大丈夫ですとのお言葉をいただき，安心して過ごせた）。（高校生，特別支援学校）

子どもが事業所に通わない場合も，事業所が子どもと家族のことを気にかけて連絡することはあった。そうしたことを肯定的にとらえる回答もみられる。

- ・週に1回，どんな様子が聞くのにお電話をかけて下さったこと。子供たちの利用人数が少ない日に「どうですか。利用されますか。」と連絡をくれたこと。（小学生，通常学級）
- ・自粛していることを気にかけて下さり，何度も「困ったことはありませんか」と声かけして下さったことが本当にありがたかったです。（小学生，特別支援学級）
- ・時々連絡して下さった。（小学生，通常学級）

子どもと家族を孤立させず，事業所が子どもと家族を支えようとする姿勢が，保護者の安心感等につながっていた様子がうかがえる。

（3）電話等での支援について

休校期間において，放課後等デイサービス事業所のなかには，電話等での支援を実施した事業所がある。アンケートにおいては，そうした支援を肯定的にとらえる回答がみられた。

- ・テレビ電話（スカイプ・フェイスタイム）での利用も可能であったこと。（小学生，通常学級）
- ・リモートを試しにさせていただいて顔を見て話ができ子供が少し落ちついて救われました。（小学生，通常学級）
- ・オンラインでのビデオ通話をしてもらえた。45分ほどでしたが本人の話をじっくり聞いてもらえたようで良かった。（小学生，特別支援学級）
- ・早々に，オンライン支援を試行錯誤ではじめてくださり，ラインやズームで1日2回支援して下さった。（高学年，特別支援学級）
- ・リモートで30分程度活動をさせてくれた。（小学生，特別支援学校）

電話等での支援がすべての障害のある子どもにとって有効であるとは限らないが，電話等での支援が有意義であった例も少なくないことがうかがえる。

（4）感染対策について

「事業所の良かった点」については，感染対策の実施を挙げる回答が少なからずあり（20件程度），さまざまな工夫がされていたことがうかがえる。

- ・手洗いの徹底に加えて，顔洗いも定期的に行ってくれていたこと。送迎の車の消毒もきっちりと行っていたこと。（低学年，特別支援学校）
- ・事業所のスタッフの方々には感謝しかありません。毎日アルコール消毒など大変だったと思います。（中学生，特別支援学校）
- ・感染予防をしっかりとりました。マスク，手洗い。密にならないように，人数をわけて活動

する。送迎もわかる。(中学生, 特別支援学校)

- ・マスクも消毒もきっちりして開所してくれていたこと。老人介護にかかわる等の外部との接触の多いスタッフやボランティアの出入りを控えてくれたこと。(高学年, 特別支援学級)
- ・職員の居住地によってリスク順位をつけ, 重度の障害児と分けて対応されていた。(高校生, 特別支援学校)
- ・昼食で密になるのを避ける上でも昼食を済ませてから送迎にしてくださった。(高校生, 特別支援学校)

ただし、「事業所への疑問や不満」については, 自動車による送迎が実施されなかったことを否定的にとらえる回答がみられた。感染対策として自動車による送迎を控えた事業所があり, そのことによって放課後等デイサービスに通えない子どもがいたことがうかがえる。

- ・3密を避ける為しかたないですが, 送迎は各家庭でしてほしいと言われたこと。車が無いので電車で親が送迎するのは負担が大きく, 学校が再開されるまで事業所の利用はやめました。(中学生, 特別支援学校)
- ・迎えに来ていただけなくて, 送りは保護者がする必要があった(車で片道約20分)。(中学生, 特別支援学校)
- ・送迎が無かったこと。(中学生, 特別支援学校)

子どもや家族の支援と感染対策とを両立させていくための施策や工夫などが求められよう。

なお, 1件だけではあるが, 事業所が学校の運動場を借りたことに言及する回答があった。

- ・感染があったら嫌なので, 1ヶ月事業所に行ってなかったが, 密を避けるため学校の広い運動場を借りる等の対策をしてくれて親の不安を取り除いてくれたり, 少しでも子どもが通えるようにしてくれた。(小学生, 特別支援学級)

学校と放課後等デイサービス事業所との連携は多くの課題を抱えているが, 事業所による学校施設の活用がなされている例は注目すべきものであろう。

5. 学校に関すること

(1) 休校期間中の「受け入れ」について

アンケートでは, 「学校の対応に関して, 良かったと感じておられること」と「学校の対応に関して, 疑問を感じたこと, 不満に思ったこと」について, 自由記述での回答を求めた。

「学校の良かった点」については, 休校期間中に学校が子どもの「受け入れ(預かり)」を実施したことを肯定的にとらえる回答が多かった(40件程度)。

- ・特例預かりを毎日希望通り預かってもらえたのが助かった。(小学生, 通常学級)
- ・休校中もやむを得ない事情がある時は預かってもらえた。(小学生, 特別支援学級)
- ・休校中, 親子で煮詰まってしまったので, 休校中に特例措置を利用させてもらえた。(小学生, 特別支援学級)
- ・休校中に預かりを実施してくれたこと。(中学生, 特別支援学校)
- ・午前中開校してもらえたことに, 感謝。(中学生, 特別支援学校)
- ・一応学校を開いて児童をみてくれた。(高校生, 特別支援学校)

学校の「預かり」によって保護者の仕事が支えられたことに言及する回答もあった。

- ・預かりがあり、仕事ができたことはありがたかったです。(小学生, 通常学級)
- ・預かっていただけたのは、仕事をしているので助かりました。(小学生, 通常学級)
- ・午前中の預かりでとても助かった。仕事を休まなくてよかった。(小学生, 通常学級)

また、特別支援学校に関しては、「受け入れ」に際してスクールバスの運行が実施されたことに言及する回答もみられた。

- ・休校期間中も時間は短かったけれど預かってもらえたのはよかった。スクールバスも出してもらえてよかった。(中学生, 特別支援学校)
- ・平日バス運行して頂いて利用できた事です。(中学生, 特別支援学校)
- ・3月中はお弁当持参で13時30分まで見て下さったので、家で仕事出来たり、少し親も息抜きできました。バスも運行して下さってありがたかったです。(中学生, 特別支援学校)

一方で、「学校への疑問や不満」をみると、学校の「受け入れ」が十分なものではなかったことを批判的にとらえる回答も少なくない(25件程度)。「受け入れ」の条件が厳しかったことに言及する回答がみられる。

- ・預かりが出来るが、まずはデイサービスにお願いしますと言われた。(小学生, 特別支援学校)
- ・学校の預かりに行かせたかったが、条件に当てはまらず預けにくかった。(小学生, 特別支援学校)
- ・初めからもう少し特例受け入れの条件を緩和してほしかった。(小学生, 特別支援学校)
- ・休校中の子どもの学校預かりはかなり制限があり、毎日ではなく、結局預けるのは断念した。(中学生, 特別支援学級)

また、「受け入れ」の時間が短いこともあり、就労している保護者にとっては、学校の「受け入れ」は必ずしも十分なものではなかったようである。

- ・預かりがあったものの、短時間で、仕事を持つ人はどうも利用できなかった。(小学生, 特別支援学校)
- ・預かり時間が1日2時間から3時間って、働いているお母さんには無理があると思います。(中学生, 特別支援学校)
- ・学校の預り時間が短かすぎて、まったく役に立たなかった。2時間ぐらいじゃ、仕事には行けません！なんとかして事業所に頼るか、感染の心配があるのに祖父母に預けるしかなかった。(中学生, 特別支援学校)
- ・仕事に行かなければならないのに、受け入れ時間が9時から11時半までで、自分で送迎しなければならないし、午前中だけの受け入れでは意味がないと感じました。(中学生, 特別支援学校)

そして、通常学級に在籍する子どもの保護者からは、「受け入れ」の内容を批判的にとらえる回答がなされている。

- ・預かりの間、座っていないといけなかった。(小学生, 通常学級)
- ・特例預かりを利用してしたが、「先生は教えてはいけない」「座学」「折り紙やぬりえはOK、でも持ち帰りはダメ」等、例外やよくわからないルールが多く、子どもも実のある時間を過ごせなかった。(小学生, 通常学級)

休校期間中に学校が子どもの「受け入れ」を実施したことは重要であったものの、その内実については課題も存在していたことがうかがえる。

(2) 休校期間中の連絡について

「学校の良かった点」については、休校期間に子どもの担任教員による電話や訪問があったことを肯定的にとらえる回答が多くみられた（45 件程度）。教員と相談ができたことを肯定的にとらえる回答もあった。

- ・ 1 週間に 1 回は電話などで様子を聞いてくれたこと。（小学生，通常学級）
- ・ 週に一度電話で困ったことなど話を聞いてくれたこと。（中学生，特別支援学校）
- ・ 家庭訪問や電話での様子伺いを何度もしていただいて親も子も安心できました。（小学生，通常学級）
- ・ 先生が週に一度くらい訪ねてくれた。（小学生，特別支援学級）
- ・ 何度も訪問，電話連絡があったこと。（中学生，特別支援学級）
- ・ 定期的に担任の先生からご連絡をいただき，子供の様子や悩みなどを相談できた。（小学生，特別支援学校）
- ・ まめに連絡頂けたので，いろいろ相談が出来ました。（中学生，特別支援学校）

しかし，一方で，「学校への疑問や不満」をみると，学校・教員から十分な連絡がなかったことを否定的にとらえる回答もある。

- ・ 担任からの電話連絡が後半に 1 度しかなかった。（小学生，通常学級）
- ・ 休校中の健康管理や子供の様子確認がほとんどなかった。（高校生，特別支援学校）
- ・ 先生と親は話をしたが，子供と話すことはなかった。（小学生，通常学級）
- ・ Zoom などオンラインで少しでも学校と子どもが繋がれたらと思う。子どもとは電話での会話もなく，一切繋がりがなかったのが残念。（小学生，特別支援学校）

これらの「疑問や不満」は，教員と保護者とのコミュニケーションや，教員と子どもとのコミュニケーションについての，保護者の期待の表れでもあろう。

(3) 休校期間中の課題（宿題）について

「学校の良かった点」については，休校期間中に課題（宿題）が用意されたことを肯定的にとらえる回答が少なからずみられた（15 件程度）。

- ・ 復習の課題がちょうどいい量だった。（小学生，通常学級）
- ・ 宿題の量は適当であった。また，親にも子どもにも課題の完了を強要しなかったので楽な気持ちでいられた。（小学生，通常学級）
- ・ 中学に進学したばかりでしたが，出された課題は適切だったと思います。（中学生，特別支援学級）
- ・ 宿題を沢山出してくれたこと。（中学生，特別支援学校）

また，「学校への疑問や不満」については，特別支援学校に在籍する子どもの保護者から，課題が用意されなかったことを否定的にとらえる回答がなされている。

- ・ 課題などがなかったこと。（中学生，特別支援学校）
- ・ 障害があるにせよ，少しは課題的なものも，時間のめりはりのため，あっても良かったと思う。（中学生，特別支援学校）

しかし，「学校への疑問や不満」をみると，休校期間中の課題の多さや，子どもが課題に取り組むことの困難さなど，課題の否定的側面に言及する回答が少なくない（30 件程度）。「休校期間中に困ったこと」についての質問に対して，「学校から出された宿題・課題が大変だった」を選択した保護者

の割合は、特別支援学校在籍児では 6.6% であるが、特別支援学級在籍児では 29.7% であり、通常学級在籍児では 53.9% に及んでいる。

- ・宿題が多く家庭学習が困難な時、頑張ってくださいと言われ少し不満でした。(小学生, 通常学級)
 - ・宿題の量が急に増えたりして、子どもへの負担が多かった (小学生, 通常学級)。
 - ・休校の間、課題をすることになっていたが、なかなか難しく取り組むのに苦労した。また、問題等が分からないため取り組む気力を維持することも難しくなってしまった。(小学生, 通常学級)
- 授業で扱われていない内容が課題になっていたことを批判的にとらえる回答もみられる。
- ・習っていない所も宿題であった。(小学生, 通常学級)
 - ・学校から出される課題は習っていないものも多く、親がみてやらないと到底一人では学習できなかったと思う。我が家はみてやる時間がありましたが、1 人親家庭や両親がフルで働いておられる家庭では大変だったと思う。(小学生, 通常学級)
 - ・習っていない先の勉強を教科書と親ですすめる宿題。(小学生, 特別支援学級)

そして、子どもの宿題の世話が保護者の負担になっていたことを批判的にとらえる回答が少なくない。

- ・なんでも親ありきの課題ばかりだったので、いかがなものかと思う。(小学生, 通常学級)
- ・親がいないとできない課題が多く、仕事をしているので、夜遅くの勉強に不満を感じました。(小学生, 特別支援学級)
- ・宿題の管理や丸つけ等を保護者にやらせていたのがかなり大変だった。(小学生, 特別支援学級)
- ・宿題が仕事をしていない母向けのように感じた。(小学生, 特別支援学級)

休校期間中の課題が子どもと保護者の大きな負担になっていた例が少なくないことがうかがえる。

(4) 感染対策について

「学校の良かった点」については、感染対策が念入りにされていることを肯定的にとらえる回答がみられた。特に、特別支援学校のスクールバスが増便されたことを肯定的にとらえる回答が複数みられた。

- ・自粛が終わってからのスクールバスの増便。(小学生, 特別支援学校)
- ・スクールバスの人数を減らしバスの本数を増やしてもらえた。(小学生, 特別支援学校)
- ・送迎バスの乗車率を 60% 以下にするためマイクロバスを 5 台増便して下さったこと。(高校生, 特別支援学校)

ただし、スクールバスに乗車する人数が多いことを批判的にとらえる回答もある。

- ・密になってはいけないといわれる中で、支援学校のバス通学がいつもとかわらずのたくさんの生徒人数をのせての通学なので、感染対策といった点では、マスクもできない子どもたちが多い中、バスの人数制限をして 2 便だすとかすべきではと思っています。(高学年, 特別支援学校)

また、通常学級に在籍する子どもの保護者からは、教室が過密になることを危惧する回答もなされている。

- ・休校中の登校は学年ごととなっており、40 人近くが教室に集まることになっていました。地域ごとや、少人数にして教室を分けて授業を行うべきだともいいました。(小学生, 通常学級)
- ・40 人学級をそのままにしたこと。ぎゅうぎゅう詰めの教室で三密を回避できるとは思えない。クラスを増やすべきだった。積極的に三密を回避しようとしているとは思えない。言葉の上だけ

の安心・安全でしかない。(小学生, 通常学級)
感染対策という観点から学校のあり方を見直すことも必要であろう。

6. 感染をめぐる問題

(1) 感染した場合のこと

「今後の心配」については、感染に関する不安に言及する回答が多くみられた(55件程度)。

障害のある子どものなかにはもともと疾患等を抱えている子どももあり、そうした子どもについては特に不安が大きくなっていることがうかがえる。

- ・呼吸器系の病気を持つ障害のある子供を感染させないようにできるか心配。(小学生, 特別支援学校)
- ・すぐ低血糖などになり入院になるので、やはりコロナがとてもこわく不安です。(小学生, 特別支援学校)
- ・手洗い, うがい, マスクは本人も意識して頑張っていたが, 小さいころから気管支が悪いので, 感染すると重症化が心配。(中学生, 特別支援学級)
- ・てんかん発作を持っている子なので感染した場合のリスクが心配。(高校生, 特別支援学校)

また, 子どもが感染した場合の生活についての不安も記されており, ケアを必要とする子どもの「隔離入院」についての不安がうかがえる。

- ・もし, 感染症にかかった場合, 本人の特性上, 隔離生活が送れるのか…。保護者の付き添いなしでの隔離入院ができとは思えず, そのような場合はどうなるかが心配。その為, 世間より早く自粛生活に取り組んでいた。(小学生, 通常学級)
- ・感染したら隔離入院されますが, しゃべれず自分の意思も伝えられない場合は付き添ってよいのかどうか。(中学生, 特別支援学校)
- ・本人が感染した際の隔離入院が非常に難しい。(高校生, 特別支援学校)

そして, 特に多かったのは, 保護者・家族が感染した場合の生活についての不安に言及する回答である。保護者が子どものケアを担えなくなることへの不安が示されている。

- ・自分(母)が万が一感染してしまった時の子供の事。(小学生, 通常学級)
- ・コロナに親がかかった時, 見てくれる人がいない。(小学生, 特別支援学校)
- ・親の感染症が重症になった時にめんどろを見てもらえる人がいない(入院になったらどうしよう不安です)。(小学生, 特別支援学校)
- ・子供を含め, 家族が感染した時, 仕事と育児など, どのように生活したら良いかわからない。助けて貰える人がいない。(小学生, 特別支援学校)
- ・家族が感染したときに子どもの医療的ケアをお願いできるところがない。(中学生, 特別支援学校)
- ・母子家庭で子供と2人暮らしなので2人共感染して入院ならまだしも, 私だけが感染した場合, 子供が一人になってしまうので不安に思います。(高校生, 特別支援学校)

「行政への要望」についても, 子どもや保護者が感染した場合の対応を求める意見がみられる。

- ・親だけが感染した場合, 障害のある子供の生活が保障されるのか, どうなるのか不安です。(低学年, 特別支援学級)

- ・今後こわいのは感染した時の事です。親が感染しても子供をおいて入院できないので、見てもらえる施設やヘルパーさん、もしくは一緒に入院できる所などあれば安心できます。また本人が感染した際、無症状や軽症でもおとなしくできるのか、ホテルなどの隔離でも部屋から出て行ってしまわないか等、心配です…。(中学生, 特別支援学校)
- ・支援が必要な子達がコロナに感染した場合の対応策を立ててもらいたい。また、その家族が感染した場合も。(中学生, 特別支援学校)

障害のある子どもや保護者が感染した場合の対策を整え、それを周知することの重要性がうかがえる。

(2) 感染対策に関すること

感染に関しては、感染対策が難しいことに言及する回答がみられる。特に、マスクの着用が難しいことや、そのことから生じる困難が記されている。マスクの着用が難しい子どもがいることを社会的な共通理解にしたうえで、そうした子どもと家族の生活が守られるような方策を考えていくことが課題であろう。

- ・色々な所や顔をよく触る。マスク着用が難しいので感染しないか不安。(小学生, 特別支援学校)
- ・マスクできない。対策できることが限られている。(小学生, 特別支援学校)
- ・子供がマスクをつけてくれない。マスクをつけることをとても嫌がる。(中学生, 特別支援学校)
- ・マスクを嫌がりできない障害児を持つ家庭は普段以上に引きこもり, 外出は困難を極めています。子供を連れて買い物はおろか, 一緒には家から一步も出れない状況です。(小学生, 特別支援学校)
- ・マスク着用が困難なため, 第2波が来ても来なくても「義務化」されることで外出が難しくなる事。(中学生, 特別支援学校)

また、マスクの着用とも関係するが、アンケートにおいては、新型コロナウイルス感染症や休校等に関する子どもの理解に言及する回答が複数みられる。

- ・知的障害の子の為、コロナに対する理解がなかなか難しい。(小学生, 特別支援学校)
- ・また休校になるようなことになると、理解できない子どもたちはいつもと違うリズムにイライラが多くなり、前回以上に大変になりそうで心配。(小学生, 特別支援学校)
- ・学校が休校になると、デイも休みになると、状況がわからない子供は落ち着かなくなる。(中学生, 特別支援学校)

新型コロナウイルス感染症をめぐる問題を理解することは、障害のある子どもの実態によっては困難な場合もあると考えられるが、障害のある子ども自身の理解を助ける取り組みは重要なことではないだろうか。アンケートにおいては、障害のある子どもに新型コロナウイルス感染症に関する説明を試みている事業所の存在が確認できる。

- ・子どもたちにわかりやすいコロナの勉強会があった。(中学生, 特別支援学級)

そうした取り組みの経験を関係者で共有していくことが必要であろう。

7. おわりに

本稿では、障害のある子どもの保護者を対象とするアンケート調査をもとに、休校期間における障

害のある子どもと家族の生活の実態などをみてきた。ここでは、最後に、特に重要だと考えられる2点を確認しておく。

第一は、どのような場合においても子どもの居場所を社会的に確保することの重要性である。アンケート調査では、休校期間中の学校における「受け入れ」や事業所の開所が重要な役割を果たしていたことが示された。学校が休校になるとともに事業所が休所になるようなことになれば、多くの障害のある子どもの日中の居場所は自宅に限定されてしまう。しかし、子どもの居場所が社会的に確保されることにより、子どもの生活がより良いものになるとともに、保護者の就労が支えられ、保護者の負担が軽減される。なお、このことは、別の視点からみると、学校や事業所は、日頃から、子どもの生活を支えているのと同時に、保護者の就労と生活を支えているということである。

第二は、学校や事業所と子どもや保護者とのコミュニケーションの重要性である。休校期間中に学校や事業所から連絡があったこと、学校の教員や事業所の職員と相談をすることができたこと、休校期間中にも教員や職員と子どもとのコミュニケーションがなされたことを肯定的にとらえる保護者が多い。学校が長期間にわたり休校になるような非常事態において、教員や職員が子どもや保護者のことを気かけ、コミュニケーションをとることは、子どもや保護者の支えになり得る。そして、このことは、学校の休校期間において顕在化したものの、日頃においても同じであろう。

なお、本稿に結果をまとめたアンケート調査には、主に事業所を通じてアンケートを実施したことによる限界もある。一つは、「事業所への疑問や負担」については、回答が抑制されていた可能性があることである。もう一つは、放課後等デイサービス等の社会資源との結びつきをもつ保護者が主な回答者になっていることであり、本アンケート調査で示された結果は必ずしも障害のある子どもと家族の全体をそのまま代表するものではない。しかし、本稿が明らかにした内容は、今後において新型コロナウイルス感染症等の感染症が流行した場合の留意点を示唆するものであり、日頃から学校や放課後等デイサービス事業所に求められている役割を浮かび上がらせるものでもあると言えよう。

注

- 1) 障害のある子どもを2人以上もつ保護者には、子ども1人につき1通（件）のアンケートを依頼した。
- 2) 小学生の割合が多く、高校生の割合が少ないのは、主に放課後等デイサービス事業所を通じてアンケート調査を実施したことが関係していると考えられる。
- 3) 本稿においては、「新型コロナウイルスへの感染」を「感染」として記述する。
- 4) アンケートの自由記述回答は簡潔なものが多く、回答の意図・趣旨が必ずしも一義的に読み取れない場合がある。また、類似の趣旨の回答であっても、そのニュアンスはさまざまである。自由記述回答のすべてを厳密にカテゴリー区分することは難しいため、およその数を示している。

参考文献

チャンス・フォー・チルドレン（2020）「新型コロナウイルスの影響を受けた生活困窮世帯の子ども

に関する調査報告書」

国立成育医療研究センター（2020）「コロナ×こどもアンケート 第1回調査 報告書」

丸山啓史（2020）『『一斉休校』から考える障害児教育』『子どものしあわせ』832号, pp.8-13

沖縄県学童・保育支援センター（2020a）「新型コロナウイルスにかんするアンケート【子ども票】集計結果」

沖縄県学童・保育支援センター（2020b）「新型コロナウイルスにかんするアンケート【保護者票】集計結果」

大津市障害者自立支援協議会（2020）「学齢期放課後支援アンケート」

西郷南海子（2020）「休校と子どもたちの生活—おとなのつながりを今」日本子どもを守る会編『子ども白書 2020』かもがわ出版, pp.24-27

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（2020）『『子どもの声・気持ちをきかせてください！』2020年春・緊急子どもアンケート結果（全体版報告書）』

しんぐるまざあずふぉーらむ（2020）「ひとり親家庭への新型コロナウイルス（COVID-19）の影響に関する調査」

田沼朗（2020）「コロナ対応で浮かび上がった学校の存在意義」日本子どもを守る会編『子ども白書 2020』かもがわ出版, pp.64-65

全国児童発達支援協議会（2020）「新型コロナウイルス関連 緊急調査（その1）の最終とりまとめの情報提供」